アイギが街にやって来た
～「ユーラシアの風」シンポジウム後記～

１９９７年１２月１２日、本学にてスラヴ文学研究室主催の国際シンポジウム「ユーラシアの風」が行われた。著名な講師陣による講演の他、詩の朗読や即興演奏、さらにソクーロフの日本未公開映画の上映もあるという、なんとも贅沢な企画である。しかし、数カ月前から準備に奔走し、モスクワと東京を行き来して、出演者との交渉、ヴィザの手配、広報などを精力的にこなしたＮ先生は、実は不安で一杯であった。なにしろ、野暮な某国外務省はヴィザ一つ出すのに山のような書類を要求してくるし、メイン・ゲストのアイギ氏が長旅とハードなスケジュールに耐えられるのかも心配だ。裏方をしてくれる予定の東大の学生ときたら、偏差値は高いが気が利かない。それにだいたいロシア語の詩の朗読なんて、聞きに来てくれる人はいるのだろうか？

だが、Ｎ先生の心配は杞憂に終わった。シンポジウム当日、研究室の電話は問い合わせが殺到して鳴りっぱなしだった。会場は立ち見が出るほどの大盛況。学生たちも気が利かないなりに、献身的に裏方役をこなした。進行が遅れた（この種の会ではつきものだ）のと、一晩寝ずに考えたタイトル「ユーラシアの風」を、なぜか「ユーラシアの嵐」と間違える人が多かったのを除けば、まずまず成功したといってよいだろう。

シンポジウムのプログラムは以下の通りである。

１．詩――ゲンナジイ・アイギ　講演と自作詩朗読（日本語訳朗読：たなかあきみつ）
２．音楽――ソフィア・グバイドゥーリナと即興演奏グループ「アストレイア」
　　ヴィクトル・ススリン　講演
　　アストレイア　即興演奏
　　グバイドゥーリナ　講演
３．映画――Ａ．ソクーロフ監督「ロベール　幸せな人生」上映（解説：児島宏子）
４．講演と討議
　　亀山郁夫（東京外語大教授）
　　中沢新一（中央大教授）
　　討議及び質疑応答

総合司会：沼野充義　　通訳：吉岡ゆき

さて、盛り沢山だった今回のシンポジウムだが、やはり待望の初来日を果たしたアイギ氏を抜きに語ることはできないだろう。世界的に有名な詩人である氏の業績については今さら触れるまでもないが、間近に見たアイギ氏は、大物であることを感じさせない気さくな人柄と、旺盛な好奇心とでたちまち私たちを魅了した。気候も文化も全く違う国にやって来て、お疲れにならないだろうかとこちらは秘かに心配していたのだが、本人はいたって元気。なにしろ来日したその夜、ホテルの近所を散歩していて道に迷ったほどである。フランス語と英語を織りまぜて通行人に道を尋ね、どうにか宿までたどりついて事なきを得たそうだが、「道行く人を見るのが面白かった」と平気な顔。東京という街のせわしなさや人の多さも、アイギ氏はなにげなく楽しんでしまうのである。通り過ぎるサラリーマンを見ては、「あの人は哲学的な顔をしてい

る」と感心したり、子供たちを見ては、「チュヴァシの子供たちみたいだ」と目を細めたり、物事や人々に対する愛情のこもった眼差しが印象的だった。

わずか８日間のうちに、東京と札幌を往復し、いくつもの講演やインタビューをこなすという忙しい日程の合間を縫って、１２月１４日には大学院生たちとともに鎌倉観光にも参加していただいた。これに先立って学生たちから同行者を募ったところ、気弱な東大生たちは当初、「ロシア語に自信がない･･･」「緊張しそう･･･」と腰が引けていたが、アイギ氏の魅力には抗しきれず、筆者を含めて結局６人が参加することになった。当日は、私たちの日頃の行いの良さを反映してか、雲一つない快晴。まず足を運んだのは、四季折々の花が美しい瑞泉寺である。閑静なたたずまいはアイギ氏にも気に入っていただけたようだ。好奇心旺盛な氏は早速、「あれは何という花だ」「この木は何だ」と随行の学生たちを質問責めにしたが、なにぶんこちらは植物の名などにはとんと疎い無骨者。ゴーゴリとゴーリキーの区別はついても、山茶花と椿の区別はつかぬ。よってたかってああでもない、こうでもないと思案した挙げ句、最後は笑ってごまかした。

昼食は蕎麦屋に入った。当たり前だが、蕎麦しかなかった。気の利かない学生たちは、アイギ氏が箸を使えるかどうかなど考えもしなかったのだ。しかし、店の人が子供用のスプーンを出してくれて、どうにか助かった。割箸とスプーンで鍋焼きうどんと格闘する詩人の姿は涙ぐましいものであったが、健気なアイギ氏はそれでも笑顔を絶やさず、「おいしい、おいしい」と喜んでくれた。慣れない箸で海老を捕まえようと苦労する一方で、学生たちを相手に熱っぽく詩論、詩人論などを語るアイギ氏。パステルナークの自然観や自らの詩についてなど、話は尽きない。学生たちのつたないロシア語にも根気よく耳を傾け、質問には丁寧に答えてくれ、ますます私たちを感動させてくれたのだった。

その後、鎌倉山にある棟方志功美術館へ。市の中心からやや離れているため、観光客の余り多くない「穴場」である。ところで棟方は、かのブブノワとも親交のあった人。アイギ氏も、「うん、確かにロシア・アヴァンギャルドと通じるところがあるね」と言って、鮮やかな色使いの板画の数々に熱心に見入っていた。

さて、強行軍にそろそろ疲れの見えてきたアイギ氏だが、やはり大仏を見逃すわけにはいかない。一行は近くの喫茶店で休憩した後、ぞろぞろとバスに乗り高徳院へ向かった。中へ入り、木立の向こうに大仏が現れると、アイギ氏は思わず、ほお、と感嘆の声。静かな冬の空の下、たたずむ大仏を見つめる詩人の真剣な目は、絵はがきやガイドブックでおなじみのこの観光名所が、実は人々の祈りのこめられた神聖な場所なのだということを、改めて思い起こさせてくれた。

かくして、アイギ氏と私たちの休日は無事に終わったのだった。素晴らしい思い出を残してくれたアイギ氏に、心から感謝を申し上げたい。ユーラシアから吹いてきた「風」を存分に感じることができて、私たちは本当に幸せであった。昨年の「ロシアはどこへ行く？」シンポジウムの時のそうだったが、第一線で活躍している作家や研究者たちと直に触れ合う経験は、私たちにとって大きな財産になるだろう。すっかり味をしめた学生たちは、心配症のＮ先生が、懲りずにまた来年もこんな素敵な企画を立ててくれないかなあ、と秘かに楽しみにしているところである。

（前田　記）